

大学の授業のオンライン化をめぐる一考察

— 「異物」を経験することの重要性について —

鈴木 祐 丞

I

新型コロナウイルス感染症の流行拡大のさなかにあつて、日本ではほとんどの大学が、2020年度前期授業に、何らかの形態での遠隔授業を¹導入した。² 9月以降の後期においても、依然多くの大学で遠隔授業が実施されている状況³を受けて、萩生田光一文部科学大臣は、2020年11月19日に行われた国公立大学の代表者との会合で、今後、感染対策を講じたうえで、可能なかぎり対面授業を実施するよう大学側に要請した。⁴ これに対して、日本私立大学連盟会長の長谷山彰・慶応大学塾長が、「新しい教育、研究の形態ができようとしている」と応答するなど、⁵ 大学側は、コロナ禍の収束如何にかかわらず、今後もオンライン授業の活用の道を模索していくことが予想される。実際、遠隔授業が日常化するにつれ、大学関係者からの、オンライン授業のメリットに（も）注目すべきという声⁶は、高まっているように感じられる。

もちろん、大学における実験・実習等の授業のオンラインでの完全実施には（現在の ICT 等を前提に考えれば）難しさがあつて、少なくともそれらについては今後も当分は対面での実施がノーマルでありつづけると思われることから、大学のあらゆる授業が近いうちにオンライン化されることは考えにくい。それでも、実験・実習等以外の授業、つまりは大学で開講される大半の授業については、そう遠くない将来、少なくともその恒久的なオンライン化の是非が真剣に検討される可能性はある。

こうした状況を前に、われわれ大学関係者は一度立ち止まり、授業のオンライン化に関して、改めて冷静に考えてみるべきと思われる。対面

授業においては存在しながら、オンライン授業では失われてしまう（失われてしまひやすい）、学生の学びにとって本質的な何か、そのようなものはあるのだろうか。もしその何かがあるのだとすれば、多くの授業が恒久的にオンライン化されていく状況を迎えるとしても、大学関係者はそのなかで可能な限り、それを固守するよう努めなくてはならないはずである。⁷

II

その問いについて考えるために、ここで、今年度前期に実際にオンライン授業を受講した学生たちの声に耳を傾けてみよう。筆者が所属する秋田県立大学では、今年度前期、一部の実験・実習科目をのぞきほぼすべての授業を遠隔で実施した。その多くは Zoom を使用したリアルタイム型か、YouTube 等を使用したオンデマンド型か、それらのハイブリッドであった。Zoom を使用したリアルタイム型の場合、学生は基本的にカメラおよびマイクをオフにして受講し、表示名を学籍番号（+氏名）にしていた。なお、後期は基本的にすべての授業を対面に戻して実施している。筆者が後期に担当している「哲学・倫理学 B」の授業（コロナ禍における人間関係の変化と自由の危機をテーマとしている）の受講者（学部1、2年生が主）は、前期にそのようなオンラインの形態で、おもに教養科目や専門基礎科目の授業を受講していた。「哲学・倫理学 B」受講者のうち19名から、前期のオンライン授業の経験をふまえて、オンライン授業のプラス面とマイナス面について、自由に意見を出してもらつた。以下に学生たちの意見の一部をそのまま記す。⁸

オンライン授業のプラス面

- ・「自由裁量時間が増える」「時間に余裕が持てる」「通学などの移動時間を違うことに使える」「移動がないから楽」（同様の意見が他にも多数）
- ・「自分にとって最も良い環境で受けることが出来る」
- ・「オンデマンドだと授業をみなおせる」
- ・「目的以外の要素をなくせる。外部との隔絶」
- ・「言いたいことをはっきりと言える（向かい合っていないから）」
- ・「受講者側のムダが減る。それに伴い、授業内容が増える」

オンライン授業のマイナス面

- ・「人と関わっている感覚が薄れる」「人とのコミュニケーションを容易にとれなくなった」「人と話すときに語い力が減った」「人との関係をもつのが怖くなる」
- ・「グループワークがやりにくいため他の生徒から学びが少ない」
- ・「プライベートな空間でも仕事や授業を受けないでなくなる」
- ・「授業が一方的になりやすく、誰か一人による授業になりがち」
- ・「メリハリなく授業を受けることになる」「積極的に講義に参加しなくなる（集中しない）」
- ・「自分が面倒だと思ったことはとことんやらなくなってしまふ」「向き合いたくないこと、見る必要のないものをみなくなる」

総括的に言えそうなこととしては、オンライン授業の最大の特質とは他者（他の学生や教員など）の不在という事態であり、結局その特質が、プラスにもマイナスにも作用しうるのである。オンライン授業は自宅で受講できるし、さらにはオンデマンド型であれば自分の都合のよい時間に受講できるので、自分のペースでの学びに適している。その反面、他者の不在は当然のことながら人間関係の希薄化を招くし、また他者の視線の欠如は集中力の低下にもつながる。

対面授業では存在しながら、オンライン授業

では失われてしまい（やすく）、それでいて学生の学びにとって本質的な何かがあるのかどうか考えるにあたって、きわめて示唆的であるように思われるのは、オンライン授業のマイナス面として出された、「自分が面倒だと思ったことはとことんやらなくなってしまふ」「向き合いたくないこと、見る必要のないものをみなくなる」という意見である。それは言い換えれば、これまで日常的に行われていた対面授業においては、自分にとって面倒で、向き合いたくないことであっても、向き合うように強いられていたということだ。

III

学生が教室で授業を受ける。机の上にテキストやノートを開き、教壇に立つ教員の声に耳を傾ける。周りには他の多くの学生たちがいる——対面授業で学生は、実に多くの「異物」——既存の自分と必ずしも親和性の高くない物事——と出会う。それはまず教員であり、そして周りの学生たちである。彼・彼女らの存在、眼差し、声、感情、思考などである。そしてまた、テキストなどにもさまざまな形で「異物」は潜伏している。対面授業とは、一面から見れば、こうした無数の「異物」を経験する場と言えるだろう。学生は、教室で、自分とは異質の他者たちを、そうした他者たちに由来する様々な物事を、さまざまな仕方で経験する。そして既存の自分を変えていく。「異物」による侵襲に身をさらし、未知への不安のなかで時に抵抗しつつ、予想しなかった仕方で自分を変形させていく。そして対面授業にあっては、基本的に、そうした「異物」は、嫌でも向き合わざるをえないものとして学生の前に立ち現われる。学生は教室で、教員やほかの学生の眼差しにたえずさらされ、彼・彼女らの声を浴び続け、異質な思考などと向き合うことを要求される。対面授業において学生は、こうした「異物」の経験を通じて、新しい知識を身につけたり、理解を深めたり、考えを更新したりするのである。

見方を変えれば、実は対面授業とは、そこに参加することにきわめて大きな労力を要する場だということだ。学生にとっては（教員にとっ

ても) 対面授業は、できれば避けて済ませたいのである。そこに参加することで、学生は「異物」による侵襲の危険にたえずさらされる。それは決して楽なことではないのだ。コロナ禍において非対面授業(遠隔授業)を経験することで、学生たちは、これまで自分たちが、そのような過酷さの中に日常的に身を置いていたことに、はからずも気づくようになってしまった。

他方、オンライン授業では、「異物」の経験を回避することが、少なくとも対面においてより、容易にできてしまう。例えば Zoom を使用したりリアルタイム型の授業において、通信環境の制約やプライバシーという問題を盾に、学生が自分のカメラをオフにして参加すれば、対面での人間関係の前提である相互承認⁹の均衡——お互いを意味のある他者として認めあうこと——が崩れる。画面上で表示名だけの存在となったその学生は、他者から気づかれることなく他者を見下ろし、一方的に他者の存在をコントロールできるようになる。その学生は、授業の場に居合わず他者を、何らかの対応を要求している他者、意味のある他者と見なさないですますことができてしまう。するとそこでは、「異物」の経験は、もはや他者から強いられることではなくなり、ただ学生の自律的な選択によってのみ可能なものとなる。学生がそこで、「異物」の経験という苦い薬をあえて手に取る選択をしないならば、その学生は、形式上授業の出席者として Zoom の画面に表示名を連ねながらも、現実には他者とのかかわりを断絶し、他者が押し付ける「異物」から身をかわしている。身をかわしたうえで、その学生は授業中、既存の自分と親和性の高い物事ばかりと、安心して向き合うことだろう。例えばそれは(その授業と関連する／しないことについての)自学自習という形をとるかもしれないし、テレビを観るとかスマホをいじるといった形もとらう。

オンライン授業では「自分が面倒だと思ったことはとことんやらなくなってしまう」「向き合いたくないこと、見る必要のないものをみなくなる」とは、おそらくこのような事態を指している。オンライン授業で学生は、対面授業の際よりも「異物」の経験を容易に避けることができる環境に身を置くことになる。学生は他者

の存在をコントロールする側に立ち、他者がもたらす「異物」との出会いを回避することができる。既存の自分に変革を強いる「異物」との出会いは、それがいずれ大きな何かをもたらすことを深く認識している者にとってすら、きわめて労を要する経験であり、できれば避けたい事態でもある。だからオンライン授業では、多くの学生が、きわめて自然なこととして、「異物」からひらりと身をかわし、既存の自分と親和性の高い物事との戯れにいそむようになる。

イギリスの音楽家で積極的な政治発言でも知られるブライアン・イーノ(Brian Eno)は、コロナ禍と文化・アートをテーマにしたインタビュー(2020年5月6日)で、次のように述べている。

[オンラインでの生活やヴァーチャルな在り方ではなく、対面での]人間同士のインタラクションで大事だとわたしが思っているのは、それが様々な面で養分に富んでいるところだね。単に会話を交わすだけではなく、実際に誰かと同じ空間を共にすると、そばにいる人間から色々な類の信号を受け取ることになる。触知できるシグナル、身振り手振り、様々なニュアンスといった具合に。で、わたしは別に ZOOM 他に反対なわけではないし、自分自身ではあまり使わないだけでね。けれどもまあ、要は幅広い食品をとる、ということじゃないかな?

だから、我々が精神面で受け取るインプットというのは、ある意味食餌なんだ。それに頼って我々は生きているし、それを元に我々は自分たちを作り上げている。……

自分が思うままにコントロールするのが非常に楽だからね、その手の世界[オンラインの世界]は。そこが実は問題なんだろうな。他者とじかに、現実世界で会うことのよさというのは、そこでは自分のコントロールが効かなくなる、そこじゃないかとわたしは思っている。他人が相手だと、自分の思っていたようにことが運ばないことだってあるし、となったら相手に合わせなければならぬ。それをやることで、その

都度何かを学ぶんだよ。だから、自分の予想を越えた状況に対処せざるを得なくなると、人間は何かを学ぶ。ほんと、学んでいく……一種の降伏、でもあるかな。¹⁰

コントロール不能な他者たちと出会い、衝突し、降伏することを通してこそ、人間は何かを学んでいく。

対面授業では存在しながら、オンライン授業では失われてしまい（やすく）、それでいて学生の学びにとって本質的な何か——「異物」を経験することが、それなのではないだろうか。

IV

マッキンタイア (Lee McIntyre) によると、「ポストトゥルース (post-truth)」——「公共の意見を形成する際に、客観的な事実よりも感情や個人的な信念に訴える方が影響力のある状況を説明するないしはあらわすもの」¹¹ ——という現象、概念が欧米の大衆に広く認知されるようになったのは、2016年末ころのことである。¹² 「ポストトゥルース」はもちろん、直接的には、多くの人々の行動が、真実とは無縁でありながらも訴えるところのある情報によって左右されるようになった、2016年の大統領選挙以降のアメリカ政治のあり方などを諷刺的に表現する言葉である。こうした「ポストトゥルース」の時代にあっては、真実は容易に、他の何かに従属してしまう——例えば、ある人物が、自分の意に沿わない選挙結果を前にして、確たる証拠もないままに、選挙は何者かによって盗まれたとわめき立て、それを真に受ける人が多数存在するといった具合だ。

大学が、授業における「異物」の経験の重要性を認識しないままに、授業のオンライン化を推し進めるならば、「ポストトゥルース」という現象を助長することになりかねない。つまり、そのとき大学は、既存の自分の思考や信念と親和性の高い同質的な物事だけに反応し、自分に変革をもたらす真実へと導きうる物事からは目を背けるのを当然のこととするような学生を、大量生産してしまいかねない。

自分の周囲から「異物」を排除し、既存の自

分と同質的なものだけに囲まれていることは、きわめて楽である。大学教育の責務の一つとは、そのようにいわば自分のねぐらでぬくぬくと過ごそうとする学生たちを、他者たちとの真剣な戦いの場へ引っ張り出すことなのではないか。

註

¹ 遠隔授業は、Zoom などのアプリを使用したオンラインでのリアルタイム型授業、YouTube などのプラットフォームを使用したオンラインでのオンデマンド型授業、授業資料の配布と解説等をオンライン／オフラインで展開する資料配布型授業の三者に大別されうる。なお本稿では前二者をオンライン授業と呼ぶ。

² 文部科学省「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況」（2020年7月17日）参照。

³ 文部科学省「大学等における後期等の授業の実施方針等に関する調査」（2020年9月15日）参照。

⁴ 『時事通信ニュース』2020年11月19日 (<https://www.jiji.com/jc/article?k=202011900559&g=soc>)。

⁵ 『朝日新聞』2020年11月19日 (<https://www.asahi.com/articles/ASNCM6GJBNCMUTIL019.html>)。

⁶ 例えば田中優子・法政大学総長は、「オンライン授業に手応えを感じ」ており、授業の「オンライン化は、大学の学びを江戸時代の個人教育へと変え、「一斉の学び」から「個々の学び」へ変化させていく」だろうと述べている（「"内職" 絶滅？ 法政大・田中優子総長「オンライン化で『個々の学び』へ」」 (<https://dot.asahi.com/wa/2020071500029.html?page=1>)）。

⁷ ここで付言しておく、本稿の考察対象は、あくまで「大学の授業のオンライン化について」である。より広く「教育のオンライン化について」や、「大学という存在自体のオンライン化について」といった論点もありうる（後者については、アガンベン (Giorgio Agamben) がきわめて批判的に論じている

〔「学生たちへのレクイエム」〕

(<https://www.iisf.it/index.php/attivita/pubblicazioni-e-archivi/diario-della-crisi/giorgio-agamben-requiem-per-gli-studenti.html>) 参照) が、これらの論点は本稿の考察対象外である。

⁸ もちろん以下の意見をもって日本の大学生の一般的な見解と見なすことは難しい。ただし、国際基督教大学や関西大学などが行なった遠隔授業に関するアンケート結果

(<https://www.icu.ac.jp/news/2008151300.html> (国際基督教大学)、

https://www.kansai-u.ac.jp/ja/about/pr/news/2020/11/3_219247.html (関西大学)) には、同様の回答傾向を見出すことができる。

⁹ ホネット (Axel Honneth) はキャヴェル (Stanley Cavell) の議論を引き合いに出しつつ、次のように述べる。「「承認すること (to acknowledge)」とは、二人称の人物が示す行動表現が何らかの性質をもった対応を要求するものと理解できるような態度を引きつけることを意味する。……そしてそのような態度をとることができないということは……結局、社会的関係を保持することができないということを意味するのである」(アクセル・ホネット (辰巳伸知・宮本真也訳)『物象化承認論からのアプローチ』、法政大学出版局、2011年、68頁)。

¹⁰ ブライアン・イーノ (坂本麻里子訳)「利益の出ないモノをいかに大切にすることができるか——再解釈される文化とアート」、『コロナが変えた世界』、ele-king books、2020年、183-185頁。

¹¹ リー・マッキンタイア (大橋完太郎監訳)『ポストトゥルース』、人文書院、2020年、20頁。

¹² 前掲書、15頁参照。